

令和8年2月3日

総合教育会議 会議録

長岡市

1 日 時 令和8年2月3日(火曜日)

午前10時から午前11時50分まで

2 場 所 アオーレ長岡 大会議室

3 出席者

市 長 磯田 達伸

教 育 長 金澤 俊道 教育委員 熊倉 達也 教育委員 大久保 真紀

教育委員 廣川 佳予子 教育委員 恩田 富太

4 職務のため出席した者

地方創生推進部長 五十嵐 智行 教育部長 江田 佳史

子ども未来部長 星野 麻美 政策企画課長 中村 真理子

教育総務課長 佐藤 陽子 教育施設課長 野崎 敏行

学務課長 大竹 美加 学校教育課長 中村 一幸

学校教育課主幹兼管理指導主事 佐々木 潤 学校教育課主幹兼管理指導主事 小嶋 修

学校教育課主幹兼管理指導主事 本間 祐史

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐 山内 清美 教育総務課庶務係長 今井 香

6 会議の経過

(佐藤教育総務課長) 本日は大変な雪の中をお集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから、令和7年度長岡市総合教育会議を開会いたします。私、本日進行いたします教育総務課長の佐藤でございます。よろしくお願いたします。最初に、磯田市長からご挨拶を申し上げます。

(磯田市長) おはようございます。本日はお忙しい中、また足元が悪い中、早朝からお集まりいただきましてありがとうございます。実はこの大雪で昨日の夜半、殿町のラーメン大吉という店の前のアーケードが潰れて、危機管理防災本部や土木部、消防が行って下に人が埋まっていないか等の状況確認を行いました。明日から暖気になりますので、雁木やアーケードの除雪、雪下ろしなど、安全対策を早朝からもずっとやっておりました。本当にこのような時に、総合教育会議にお集まりいただき本当にありがとうございます。

日頃から皆様方からは長岡市の教育行政の充実に本当に貴重なアドバイス、ご意見をいただきましてありがとうございます。私は、長岡の教育は順調に進んでいると思っております。昨年2月には中之島中央小学校が地域の学校運営協議会の皆さんと地域学校協働活動の推進で文部科学大臣表彰を受賞するなど、いろいろな外部からの評価をいただいております。中学校の休日の部活動の地域展開の動きの中では、文科省は長岡モデルを一つの全国モデルに展開しようということで、私もその会議に呼ばれていろいろな意見を言ったところでありますが、長岡の考え方、やり方が、おそらく全国の一つの基準になってくるのかなと思っております。その時、文科省の方も言っていました、地域のスポーツクラブとか、文化系のクラブに、部活を委ねる移行をするのではなくて、教育の一環としてしっかり教育委員会あるいは地元の自治体が、関わっていくということが大切だと。そうすることによって、部活というものが、教育的な活動であるということをしかりと関係者で認識しながら進めていくことになると。学校の先生方の仕事を軽くするためにこれがあるのではないということも長岡はずっと主張して組み立ててきたので、文科省も初めは軽くしたい、地域にある意味出していきたいという考え方が強かったようではありますが、やはり長岡のように、そこに教育的な考え方もしっかり入れていくということの方針転換をしながら、長岡

モデルが先進モデルとして、今進められているところであります。いろいろな取組が米百俵のまち長岡、「米百俵」の精神に基づいて子どもたちに対して、地域全体、社会全体で何ができるか、というスタンスを長岡市が持って、教育委員会が長岡の義務教育をしっかり進めているということは、市長としても自信を持って外部の皆さんに言っているところであります。ただ、今いろいろな課題が出てきているのは間違いのないことで、子どもたちの発達段階のいろいろな問題や不登校、引きこもりなど、いろいろな問題をどうしていくかということ、ぜひ皆様からご意見をいただきながら、改善し、より良い教育の実現をしていきたいと思っております。

最近私が感じているのは、生成AIがものすごく普及して、そういう中でその前の段階として、これからの時代に必要な子どもたちの学びの一つとして、プログラミングというものは必要だろうということで文科省も取り上げながら小中学校でのプログラミングという学びをつくってきたわけですが、市全体としても、学校外の学びとしてプログラミングを子どもたちに学んでほしいと思い、そういう機会をつくってきました。ところが、ここ1年ぐらいで一気に、そのプログラミングのコードを書くこと自体を生成AIがやってしまうから、もうプログラマーはいらないよという話が出てきて、いろいろな方に聞くと、基本的に何をつくるかというものさえしっかり人間が定義できれば、あとは生成AIが、自動的にコードを書いてプログラムをつくってくれるということになっています。ですから、ただコードを書くためのプログラマーはもういらなくなってきたと言われていています。そういう意味では時々刻々と社会が必要とする人間の能力というものも急激に変化している時代の中で、果たして子どもたちが、これから何を学んでいったらいいのかということをおそらく親御さんも、あるいは教育関係者も、試行錯誤しながら、子どもたちに接しているのかなと思っております。大きく変化、流動化している中で子どもたちの育ちをどういうふうに考えていくかということが、長岡の教育委員会のみならず、長岡全体の米百俵のまちとしての課題になっていると考えておりまして、教育委員会に全て任せるのではなく、学校外の学びをどうしたらいいかという意識も常に持ちながら、今日、教育委員の皆様方のご意見をいただきたいと思っている次第であります。いろいろ申し上げましたが、ぜひ今日は忌憚のないご意見をいただきますようどうぞよろしくお願いいたします。

(佐藤教育総務課長) 続きまして、報告、意見交換に移ります。進行は、市長が行います。

(磯田市長) 早速であります、「長岡市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画」についてまずご報告をさせていただきながら、その説明に対してのご質問、ご意見を賜りたいと思います。ではお願いします。

(江田教育部長) 【資料に基づき説明】

(磯田市長) 今、ご説明申し上げたこの計画につきまして何かご質問はありませんでしょうか。これはどういう意味なのか、どういう気持ちなのかなど、ご意見も含めていただければと。どうでしょうか。

(熊倉委員) この計画については、事前に教育委員会内の協議会や定例会で我々も一緒に参画しながら、策定に関わってまいりました。非常に良いものができたと思っております。大きく言うと教員のなり手不足と申しますか、教員人材不足と申しますか、そういうことは全体の大きな課題となっている中で、その要因の一つとして教員の働き方ということが言われているのは間違いない。それについては、過去数年間にわたって様々な取り組みがあったのですが、新潟県が県費負担教職員を採用して配置するわけですがその応募者も少ない、また一方では、各自治体の学校に配置された教職員がやりがいを持って自分の仕事を遂行できているかという疑問がつくと。そして、多くの若い教師が辞めていってしまっているということで、本当に大きな課題だと思っています。その中で市立学校の教職員が長岡市の学校に来て、働き甲斐があっといういな、子ども達の教育に専念出来て充実しているなど、そう感じてもらえば一番じゃないかなと思っています。その意味で前文にもありますが、働きやすさと働き甲斐の両立、そして使命感を高めて充実感を持って職務専念できる環境づくりと、これを長岡市が責任を持ってやるということですので、これを着実に進めていきたいと思っています。さきほど話がありましたが、大事なのは、学校もちろん一生懸命やりますし、教育委員会もやるのですが、こういうことをやっていますということを市民の皆さん方、特に保護者の皆さんから知っていただいて、よりよい教育のためには、教員の働きやすさ、充実感を高めた方が結果的に子どものためになるという共通理解でぜひ進めていきたいと考えているところです。

(磯田市長) 市民への周知という面では、どのような計画になっていますか。

(小嶋学校教育課主幹兼管理指導主事) 市民への周知につきましては、ホームページ等にて公表をさせていただき、広く周知してまいります。教育委員会としては周知するメッセージ等を保護者に対して進捗状況等を含めながら啓発を図ってまいりたいと考えております。

(磯田市長) 周知する際に何を一番伝えたいということになりますか。つまり、学校がやるのはここだよ、地域がやる場所、保護者がやる場所はここだよ、みたいなことですか。それとも他に何か周知の意図はありますか。

(小嶋学校教育課主幹兼管理指導主事) 今ほどお話いただいたように、先ほどの4ページの学校と教師の業務の三分類という表が文科省から示されております。その中で学校以外が担うべき業務ですとか、分類に基づいて地域、家庭、保護者にしっかりとメッセージが伝わるようにしていきたいと考えております。

(金澤教育長) この計画と進捗については、コミュニティ・スクールの中の学校運営協議会で必ず報告するということになっています。そこでの報告並びに計画の趣旨の話ができる場があるので、運営協議会には学校に協力していただいている地域の方たちが入っていますので、まずはそこを中心にきちんと伝えていく。その中で、学校の保護者に何を伝えていくか協議しながら進めていくことも大事だと思っています。

(恩田委員) 私が、小学校のPTA会長を務めた時にちょうど働き方改革ということが盛んに言われまして、市P連の方からも言われましたし、また学校運営協議会でお話を伺いましたが、末端までしっかり趣旨が伝わったかというとなかなか難しかったというのが実感です。やはり先生方が楽をするだけではないかという、思い込みではないですが、不安ですね、そういった声が絶えずあったように思います。このたびの計画も、先生方の残業が減る、給料が上がる、そういう単純化された話ではなくて、しっかりと趣旨を伝えていかなければならないと思う中で、書面だけの周知ではなかなか難しかったなというのが実感です。きちんと心に届くような、方法がないかと思っております。

(磯田市長) なにか案がありますか。

(恩田委員) まず各PTA会長がしっかりとお話できるかどうか。対面になりますか

ら、そこだと思います。例えばSNSを使うとか、そういった方法でも読まなければそれまでなので。

(磯田市長) 会長さんとして活動された時のお話がありましたが、働き方改革で教員のプライベートの時間もきっちりと確保してあげるべきだという、そういう考え方を受け入れない方も結構いるのでしょうか。

(恩田委員) 正直なところ、先生が楽になるというところで思考が止まっているようなこともあったかと思います。そこで、必ず、これはひいては子どもたちのためになるということを繰り返しお伝えしていたかと思います。なかなか伝えきれなかったというのは私の力不足でもありますが。

(磯田市長) 教員の皆さんとしては昔から聖職者みたいな、特別な職業だという見られ方を今でもされているのでしょうか。何か現場に立たれたよく知っている方、そういう圧力というか、期待というかはありますか。

(佐々木学校教育課主幹兼管理指導主事) 昔は、先生様々ではないですが、家庭訪問に行くと、いろいろお菓子が出てきたり、先生が叱っても先生が言うことだからと聞いてくれたのですが、最近は状況が変わってきていて、保護者の方々もすごく知識を持った方々がたくさんいらっしゃるようになって、人権とか、そういった視点からいうと、やはり先生方の発言に対する目が厳しくなっているというのは肌感でありますので、結構いろいろなことがそぎ取られるというか。それは、言い方は変なのですが、なかなか厳しくできないような状況になってきて、指導のあり方を我々もすごく考えなければいけないような関係性になってきていると思います。

(本間学校教育課主幹兼管理指導主事) 山間部の学校だと、やはり世代別に少し感覚が違っていると感じています。例えばシニア世代というのでしょうか、そういった時にやはり、学校の先生が、学校がやっていることは何でもありがとうねというような、そういうエネルギーをいただく場面を感じております。例えば、コミュニティ・スクールで参加してくださっている地域のいろいろな役職についている方々は非常に協力的で、学校のやることに対して、そうだね、そうだ、ぜひぜひというようなエネルギーを与えてくれる雰囲気があります。一方で保護者となるとそういった感覚から少し温度が下がってくるというのですか、わかっているけれど、いざ子どもの今の抱えて

いる課題ということになってくると、理想はわかるけれど、なかなかそこまではという意識で、先ほど佐々木管理指導主事も話しておりましたが、ちょっとした言葉尻を捉えて、どうなんだ、というような形で、今までずっと入っていた指導がなかなか入りづらいという感覚の部分もあります。ですので、生徒指導というよりも、保護者に対する対応の仕方に非常に時間が取られているという感覚はございます。

(磯田市長) ある意味聖職者とまで言わなくても、先生のいわば一つの権威として認められていた風潮というものがどんどん薄れてきているというような感じでしょうか。ほとんど対等な関係の中で意見の言い合いになってしまうとか、そういうことですか。

(本間学校教育課主幹兼管理指導主事) やはり場面場面だとは思いますが。保護者の方から教師に対して、その指導はどうかというような場面はもちろんありますし、一方で校長の立場として教職員を見た時に、その指導はまずかったのではないかなと思う部分もあるので、その部分がやはり保護者としては知識的に持っているものがだいぶ多くなってきている分、教職員に対する細かい要望も増えています。聖職者というところよりも、どちらかという人として、社会人としてどうなんだというふうに保護者の方からご意見が来る場合もありますし、当然学校としても、教職員に対して、まだまだもう少し頑張ってもらわないといけないのかな、柔軟に考えてもらわないといけないのかなと思うような場面は、なくはないと思います。

(金澤教育長) 私は教師だったので、若干補足を含めた話をさせていただきます。少し大きな話になって申し訳ないですが、学校側に求められるものが変わってきたというか、新自由主義という言葉がありますが、学校に成果を求めるような風潮が私が勤めていた平成の中盤くらいから出てきて、これも悪いと思いますが、学校もそこに合わせてしまうところがあり、エビデンス的なものを親に伝える、そうするといつの間にかだんだん親がお客様、クライアントになってきている。クライアントでお客様だから、成果を出してお客様に成果を還元するというような意識が現場の中で学校意識というかそういうことを求められてきて、社会的風潮、教育行政の風潮からそういうことが出てきた。そうするとどのような矛盾が起きるかという、私達は子どもたちに指導もしなければいけないのに、クライアントを指導するという大きな矛盾が出てく

るのです。お客様として扱うと言いながら、成果をそこに出しながら。でも、やはり「教育」なので、人としてその指導をしなければいけないということができにくくなって、そこに大きな矛盾が出てきて、その辺から今、市長がおっしゃった聖職者であったものがどうなのかというような、ずれとか、管理指導主事が2人話しましたが、教師に対する見方が少し変わってきたということがちょうど平成14年15年、総合的な学習の時間が始まった頃から出てきたなというのは感じています。それがいいのか悪いのかは、なかなか言えないですが、教育本来の仕事がしにくくなっているというのは、肌として感じる場所です。

(大久保委員) 働き方改革という言葉がいいのかというか、もちろん先生の働き方改革があるけれど、結局それが子どもに返ってくると思うのですね。先生に余裕が生まれれば、子どもを見る時間も増えてくる。保護者とすると、そこまで見通せている人がどのくらいいるのかなと感じていて、実際私も保護者だった時に、働き方改革だからこれをやめますという文章で来ると、「？」と感じるところはありました。先生の働き方改革があるから余裕が生まれて、子どものためになるというところまで想像がつきにくいのかなと思うので、保護者や地域の方に伝える時のニュアンスだったり、言葉だったりを選んでいく必要があるのかなと感じます。

(磯田市長) 今回の計画の趣旨ももちろん働き方改革のためというよりも、それは一つの結果で、やはり教師が本来やるべきことに注力していくためには、いろいろな業務を整理しながら地域や保護者がやれるものはやってもらいたいし、行政として教育行政ではない行政が担うべきものは担ってほしいという趣旨だと思うのですよね。確かに、説明の中で働き方改革が正面に出てくると、先生が楽をするためのことと感じられるということですね。

(廣川委員) 本計画の中に、教育の質を高めていくこと、役割分担をしながらそれをやっていくことと、あと教育の質の向上のために必要な時間的余裕の創出ということが掲げられていますが、大いなるロジックの転換というか、時間に余裕が生まれたからといって教育の質が向上すること、直結するわけではないと思います。例えば、時間の制約が先生方の自己成長とか、子どもと向かい合う情熱の機会を逆に奪ってしまいかねない。ただ時間の余裕があればいいというものでもないと思うのですね。先生

方も挑戦する時間も必要ですし、そうなった時に、先生方が、教育の質を向上してくださるためには、安心して業務に取り組める環境だとか、周りの連携してくださる保護者や地域が見守ってくださっていること、さらには、先生方がそういった教育の質を高めるために、本取り組みがあるのだというみんなが共通認識を持っていること、それがすごく大切になってくると思います。そうなった時に、オール長岡でそれができるということはすごく強みだなとっていて。みんなが同じ理念のもとに、先生方を支えている。長岡の子どもたちを育むために、先生方が専門性を発揮するためにこの取組がある、そういう認識を全員が承知していれば。まずそのオール長岡の定義ですかね。それを改めて、今一度この取組をするにあたって周知していく、みんなでも認知していく。米百俵の理念を今一度確認していくような、そういった機会にもなると私は思っているので、この取組は今後の長岡の人づくりという理念を示すのに非常に重要な取組だと思っております。

(磯田市長) 廣川委員もやはり働き方改革というものが正面に出てくることには違和感を感じる、ということですよね。この計画の1行目に、「学校における働き方改革の一層の推進」と謳ってありますので、どうしても全体が教員の働き方改革のためなのだというたてつけになっているのですよね。そういう意味ではそれを正面切って出していくと、やはり誤解されてしまうというか、気をつけていただければと私は思っているのですが、教育長、どうですか。

(金澤教育長) この計画は教育委員会の中で議決をとったものですが、ここについては、皆様から了解いただければ、今の議論の趣旨を踏まえて、見直しをさせていただきます。

(磯田市長) 私は1951年生まれで団塊の世代の次の狭間の世代で、人口爆発した世代のその下の世代なのですが、それでも私の通っていた四郎丸小学校とか南中学校は1学年6クラスくらいあったのかな、とにかく子どもが多くて、そういう意味では先生は子どもにそんな目が届かないような中で過ごしてきた世代なので、今の学校現場を見ると、本当にきめ細かく一人ひとりの子どもの個性などを先生方が常に意識して声掛けをして対応しておられるというのはびっくりしますね。そこまでやっているということは、私としてはある種の驚きを持って見ているわけなので、そこまでやって

いるのだからもうそれ以上何を望むのだということは私としては思うのです。ただ、今、市役所の窓口でも、あるいは原信のレジでも、カスタマーハラスメントで、俺はお客様なんだぞ、その態度はなんだみたいな、とにかく納得しないでお怒りになる方がいる。市役所の窓口でも、俺は税金を納めたからどうこうという方も少なからずおられるという、そういう社会になっているのかなと思っています。学校の先生が、そういうところにさらされているということを聞くと、本来の教育に対する熱意というものがそこで削がれたりしたら本当に大変なことで、学級の30何人の、それぞれの育ちを責任を持っていく中で、細かいところまでいろいろ要求されたり追及されたりするというのは、ちょっと違うのかなと思っていまして、現場は本当に頑張っていると思います。

(熊倉委員) 市長がおっしゃるとおり、ギリギリで頑張っていると思います。まさにカスハラではないですが、それがイメージする中で一番きついです。ですので、結論から言うと、学校の教育力を高めることが、子どもたちのためになってひいては、当市のためになるのだという大きな構えが必要だと思います。ハラスメントを受けると傷つきます。教員もやられた方は傷つく。そうすると時間もなければ精神的に落ち込む。そうすると、子どもに目が行き届かなくなる。質が落ちてしまう。それをまた保護者とか地域に伝えると何をやっているのだとなり、この悪循環ができます。これを断ち切れれば、子どもに対する教育は成果が上がると。それを親や地域がわかって学校は頑張っているねと褒められると教師も人間ですからやる気が出るというわけで、ますます熱があがる、そっちの循環に持っていく何かきっかけというか、踏み台になればいいなと私は思っています。どんなことやっても一定数は納得されない方もいると思いますし、中には、やはり力が不足しているなという教師もいるかもしれない。でも、長岡市の学校はこういう取組をやっていて、どこの学校でも一定のレベルは確実に守られているのだと、この安心感が大事じゃないかと思っています。

(磯田市長) この計画の話題を離れても結構ですので、これからの長岡の教育委員会、長岡の教育が、どういう方向に、あるいはどういうものを優先的にしっかり取り組むべきとか、いろいろな課題はあると思いますので、皆さんの方でお気づきの点がありましたら視野を広げながら、ご意見をいただけませんかでしょうか。

(恩田委員) 話を展開する前に、今のことについて、補足でお願いいたします。先ほど人権という言葉が出てきまして、若い保護者も知識が増えて、そういった知識を持っているからその観点から批判されることもあるというお話がありましたが、その人権こそ、先生方にももちろんあるものだと理解していただく必要もあるかと思います。また、その知識があるのであれば理解できるはずだと思っております。今までの聖職者という、先生方を語っていた概念は、先生方を守っていた部分もあるとは思いますが、確かに私達の世代が理解することは難しいと思います。であるならば先生も聖職者、万能感、そういったものから一度印象を取り外して、先生も人権がある存在で、当然労働者でもあるわけです。そうすると、私達は現役の労働者でもありますから、理解しやすい部分が出てくると思います。一度、丁寧にその辺を理解し合う機会があればと思います。それは理論的な理解になるのですけれども、それとは別に、やはり感情的な理解、理論的な理解は伝わりづらいところもあると思います。難しい思考を伴うことではなくてキャッチコピー的になんとか伝える方法も同時に必要であり、感情的な理解こそ必要なのかもしれないと思いました。

(磯田市長) 聖職者というのは極端な言い方だと思うのですが、逆に、変な先生の方がいいとか、ちょっとだらしない先生がいいとかそういう価値観というのは許容できないのでしょうか。なんとなく自分の過去の先生の顔を思い浮かべると、あまり立派な先生でない人の方がなんとなく懐かしく思い出されるようなこともあって、そんなに立派に教育者として高度なだけがいいのではないかなと思うのですが、こういう価値観の方が学校の中では通用しないでしょうね。

(佐々木学校教育課主幹兼管理指導主事) 今おっしゃられたような先生方は今もたくさんいると思います。教育理念を持って、理路整然と話せる先生もいるけれど、そういう先生が普段から堅物のような先生であるとは限らず、子どもたちに相対すると、とっでもくだけで面白おかしいことを言ってくださるような方もたくさんいらっしゃいます。あとは中学校だと教科によってもいろいろな先生がいるので、そういったところは生かされているのではないかなと思います。

(小嶋学校教育課主幹兼管理指導主事) 教師としての専門性は大切ではあると思いますが、子どもの前に立った時に教師としての人間性が問われるかなと思います。子ど

もに対してどんな眼差しを向けられるかということは教師としては大切かなと考えております。

(本間学校教育課主幹兼管理指導主事) 中学校では、市長がおっしゃるようにいろいろな先生方、多種多様であります。子どもや保護者が、それをよしとするかといったところで、先ほど小嶋管理指導主事がおっしゃったような子どもの前に立った時に、どういう姿勢を見せるかということがやはり今求められているのだろうと現場では感じておりました。ですので、いろいろな先生がいるということは、確かに子どもたちも保護者も認めているところが結構あるのではないかと、一方で、一部の声の大きい保護者や子どもにしてみると、やはりそういったものが許せないという場面もあるのかなと考えています。ですが、一般的にはいろいろな方がいて認められているのかなと感じるところはございます。

(磯田市長) 他にいかがでしょうか、どういう議論でも結構かと思えます。

(廣川委員) 今、学校現場で、多種多様な先生方がいらっしゃる、人間的な魅力がある先生方もいらっしゃるという話をしてくださったのですが、子どもたちが育つ過程の中で触れ合う大人は多種多様であるべきだと私は思っています。様々な大人と触れるからこそ、子どもたちも、多様な価値観があるんだとか、こういう大人もいるんだとかそういうことを体験していけると思います。なので、正しさだけが全てじゃない、その認識を社会全体が持つておくことはすごく重要で、正しいだけが正解じゃないよねと一部の保護者はわかっているかもしれないけれど、そうじゃない保護者もいるので、いろいろな大人がいてこそ社会、それこそこれからインクルーシブとか多様性のある子どもたちもどんどん出てきていますし学校に通学するだけが登校の手段じゃなくて、不登校という言葉ももう今そぐわないような感じですけど、学校だけが正解じゃない、いろいろな正解があるけれど、共通の認識として、いろいろな子どもがいる、いろいろな考え方の大人がいる、そういうことを認め合うような価値観を市全体で、意識の転換というか育成していければいいなと思っています。

(磯田市長) 価値観の多様性というのはなかなか難しい問題で、先般もある教育関係の会合で、たしか文科大臣の経験ある人が、学校というか行政が、不登校も一つの選択肢であるかのようなそういった発言をし始めていること、それが不登校の原因にも

なっているのでそこは迎合しないでなどその人は言っていたのです。廣川委員、どう思いますか。不登校であっても、それも一つの価値観だと社会の中で認めた方がいいと思われませんか。それとも学校へ行くべきだという原則は崩すべきではない、対応すべきだと思いませんか。

(廣川委員) 今、子どもたちの学校に行かない選択がどんどん増えてきていて、その背景も様々な理由があるということがいろいろな調査でわかっていると思います。学校に行かない子どもたちの不登校も高止まり傾向ということで、それは何を示しているかという、子どもたちに様々な学校以外の居場所ができた、いろいろな段階の子どもたちが学校に行かないわけですけれど、そこで例えば学習ができる場所、ただ行って何もしなくてもいい場所、自分の好きなことができる場所、時間の過ごし方も様々な居場所ができたことによって子どもの居場所が少しずつ増えているという状態が今あると思います。学校に行くべきか、行かないべきかの議論で語らなくてもいいのかなと思います。

(磯田市長) そういうふうと考えていくと、むしろ学校を選択しない子どもを認めて、居場所を積極的につくるべきだという考え方もあって、市長としては結構そこが悩むのです。教育委員会にそれを全部やってほしいというのも、ある意味自己否定になりますので、難しいだろうと。そうすると、教育委員会の所管外のところで子どもたちの居場所をつくるべきじゃないかということになってくると、果たしてそれは、義務教育というものをどこまで国民の義務、市民の義務として考えたらいいのかとか、学校に行かなくてもいいというメッセージを出すことの弊害とか効果とかを考えると、すごく悩むのですよね。このことについてアドバイスをいただけませんか、どういうふう考えるべきでしょうか。

(大久保委員) 先ほどの先生のことについていいですか。自分が小学生、中学生だった頃、いろいろな先生がいて、あだ名をつけたりしたと思うのですが、それは先生が嫌だからとかではなくて、好きだけそれを直接的に言えないからあだ名で言っていたみたいなのもあつたと思っています。小学校と中学校の先生はどうかと私の子どもに聞いたのですが、みんないい先生だったと言ってくれました。先生のことを嫌いということは子どもだけだったらそんなに感じないのかなと。そこに親が介入して

きて、あの先生がああだったからというのがあるのかなと思います。大人の口出しとかで子どもも変わってしまう部分があるのかなと感じているところです。私達が思っている学校は、もう数年先には全然違う形になっているのかもしれない。それはコロナ禍を経てタブレットが学校に入ってきたりとか、部活が地域移行したりとか、数年前までは全然予想もしていなかったことがここ数年ですごく起きているので、学校ってどういうところなのだろうということを考えると、また不登校の話とかも変わってくるのかなと思います。

(磯田市長) 学校のあり方そのものが変わっている、価値観が変わってきている。

(恩田委員) 私は、学校の価値としてきちんと授業を受けて学力をつけることが大事だと考えているため、そこは大前提です。一方で、不登校の当事者の子どもは学校に行くこと自体が精神の負担になっている。だからその子どもにとっては、SSRだけでなく外のフリースクールも必要だということがあります。基本的に私も多様性の方にはもっと大胆に配慮して行って、学校のあり方が変わっていく、ないし外の民間にそういった施設が増えていくということはこれから必要なのだろうと、現状そういった生徒が多いことに対しても対応する必要があるのだなとは思っています。ただし、多様性や新しい時代の価値観に対応していくにしても、社会の側はまだその価値観に追いついていない部分があって、言ってみればマジョリティーの側の学校に登校できていた子どもというところに身を置くことは、当面は優位性を持つと思うので、その場所に子どもを置きたいと思う気持ちは、保護者にとっては自然なことだと思っています。ただ、これは決してその世界が多様であるべきということの否定ではないです。

(熊倉委員) 学校が効率よく知識であったり、技術であったり、人間の社会性であったり、生きるための基礎になる部分を身につけるところであることは間違いないと思います。公立はたくさん人間に対して、一定の時間と場所を提供しているという、そういう場であることはこれからもおそらく続くでしょう。ただそれだけで満足できるかというところではありません。学校に何でも求めることは間違っていて、特に義務教育、小学校、中学校の段階では、これから生きていくために何が必要か、例えば読解力だとか読み書き算がありますが、社会性の基本的なところ、それは体験をとおして身につけていく、これはやはり学校の価値なのだと思います。学校に行かなくて

も、そういうことを身につければいいじゃないかという議論もあるかもしれませんが、それを全面に押し出すのはどうかと私も思います。ただ、学校に行かない、行けない子どもたちが、将来に生きていくための社会的自立といいましょうか、これは教育委員会なのか、自治体なのか、地域なのか親が保証してやらねばならない。そこを議論しながら、それこそ居場所とか学ぶ場というものをつくっていくことが大事だと思います。なので、行かなくてもいいよということに私は与しません、できれば行こうねと。行った方が楽しいし、ためになるよと、それが学校なんだと。ただ、行かないからといって見捨てることはしない。それで進むしかないのかなと思います。私も国の言っていることが変わってきたなと実感してまして、前は学校に行けとか、登校圧力と言ったかな。それをなくしてきて、じゃあ行かなくてもいいとなったら行かない子どもたちをどう保証するか、今は社会的自立を保障しましょうという流れで、それでいくしかないのかなと思っています。

(磯田市長) いつもその辺で悩んでいて、特にインターネットがこれだけ普及して、例えば語学は生成AIで学んだ方が効率的だという話もどんどん出てくる中で、学びの中でも、インターネットで学ぶ、あるいはAIで仮想の教師から学ぶ方が効率がいいものもあるという指摘が出てき始めました。そうすると必ずしも学校に毎日通ってそこで過ごすことが本当に教育上の効率性、特にそれぞれの知的な段階とか能力の段階がある中で、きめ細かい学びというものは、むしろ人工知能とかインターネット経由で学んだ方が効率的だという時代に少しずつなってきたなと感じていて、それは学校教育の中でもタブレット教育を導入しているわけですが、そういう意味では、学びの多様性というものが出てくる中で、必ずしも登校することを義務付けるということが本当にいいのかと思う保護者が相当出始めてきたなという中で、受け皿をもっとちゃんとつくってほしいと、学校、教育委員会がつかれないならば、そうでない部門で、所管でやったらどうかという要望もこれから出てくるのかなと思っています。例えばミライエ長岡が今年11月にフルオープンしますけれど、いろいろなブースといますか、学びの場がたくさんあります。互尊文庫は初めからそういうことを狙っているわけですが、そこに行って、いわば自分で学ぶという環境をつくっていくということが、ミライエ長岡が完成した中で、そこでは学校の先生ではない、例え

ば、社会人の方でリタイアしている人が子どもたちに教えるとか、あるいは仲間で学ぶとか、そういったプログラムが必要なのかなということ、私としては考え始めて、それを教育長といつも議論をしながら、バッティングするのではなくて補完という考え方でやっているのですけれど、その補完の領域が少しずつ広がってきているのかなということを考えて、そういう意味では、やはり変化の時代になっているのかなと思っております。

(金澤教育長) 学校に行くべきかのところで言うと、私も基本的には学校に行くべきと考えています。ただ、今の学校のままでいいのかという議論が大事で、全国で35万人の子どもたちが学校に行けなくなっているという現実が、その子どもたちがまさに今の学校教育に課題を突きつけているのだと思っています。今までは、より多くの人に効率よく知識や技能を伝えるのが学校だったのですが、これからはそういう学校ではなくなってくるはずなので、そこに一人ひとりの個性とか、学び方ということが多様になって、枠に入れられない子どもがたくさん出てきた。その子どもたちがもっと入れる、そういう柔軟な学校をつくっていくのが一番大事だと考えています。それから、それ以外のもの、場の話ですけど、これは学校とどちらを選ぶかという話には絶対ではないのではないかと考えていて、まずは学校なのだと、ただし現実として、その今の学校の枠に収まらない、そこに入りきれない子どもたちに対して何もしないわけにはいかないで、その子どもたちの学ぶ場、成長する場を提供していくことが必要だということで、私達も行政の方も今やっているわけですが、フリースクールはそういうところを補完してくださっている。その中で、後半の市長からお話があった部分のところで言うと、今、AIとかタブレットが子どもたちに一人一台ずつある中で、だからこそなおさらですが、学校での学びの価値というのはやはり体験だと思うのですね。実体験、本当の体験をして、そこで感触だったり、においだったり、それを仲間と一緒にやるという、そういう場としての学校の価値がこれから一番求められるのではないかと考えています。単純に知識を得るだけでなく、そこに人として生きるためのベースになるもの、今、小さい頃にいろいろな体験をしている大人がタブレットやAIを使って非常に便利だと思っているのですが、そういった原体験のない子どもたちが、そこにはなから頼ってしまうことはこれからどうなるのかなという心配はありま

す。それができる学校がこれから求められる学校ではないかなと、自分は考えているので、そういった学校をつくりながら、まずは学校に行くということが、大前提なのではないかなと考えています。

(熊倉委員) 生き物として、生物としての人間、肉体を持つ人間としての体験といえますか、それをやるのはやはりリアルじゃないと駄目なので、幼少期から学校集団の場に置くのはいいのだろうと私は思うのです。様々な学びの形はあるけれども、ベースになる感覚、五感も含めて、生物として生きていく力は特に幼稚園から小中学校ぐらまでは、実体験がないとだめだろうと思います。それはやはり学校として集団教育を受ける中で一番身につくものだろうと思いますので、大事にするべきだと思っています。

(磯田市長) 熊倉委員がおっしゃったことですね。私もそういうふうに来てきた人間なので、そう思うのですが、例えば、森の幼稚園みたいなものはこれから必要となると、自然の中で学ぶとか、体験するというのが必要だということを改めて言う人も出てきております。森は熊が出てきて危ないのですが、自然というものは我々にとって少し遠い存在になってきて、子どもたちが自然の中で遊ぶ体験がない。仲間と一緒にいても、仲間と腹を割った話ができなくて、ネットで繋がったりする。出会い系で出会った人間に、自分の生々しい感情というものをぶつけて、そこに引かれて、そっちの方に行ってしまうという、ネット社会特有の仮想性というか、そういう社会になってきていますよね。その中で、長岡の学校を見ると先ほど申し上げたように、現場で仲間と楽しくあるいはたまに喧嘩をしてそのビビッドな関係というのはつくられていますので、こういうところに入れない子どもがいたら、ぜひ入れるようにしてあげてほしいなとも思うのです。ただ一方で、きっと保護者の皆さんはそういったところで何かしら自分の子どもが疎外されているとか、いじめまでいかなくても、疎外されたり不適応を起こしているというふう考えた時に、別の受け皿とか、そういうものを求めるというの、仕方がないことなのかなと思って、そこは遮断するのではなくて緩やかに往ったり来たりできなければ駄目だと思うのですが、それは教育委員会任せではなくて行政側で、そういう場をつくってあげればいいなというのが、ミライエ長岡の一つのコンセプトなのですね。そこは皆さんにまたご意見をいただきなが

ら、ただ一人で学ぶのではなくてそこには学校の先生に代わる、例えば技大の教授のOBという方が何百人もいますので、そういう形でぜひ関わってくれるという人も見つかっていますので、そういう何かおじいちゃんみたいな人が関わるのがむしろいい場合もあるし、いろいろな市民活動をやっている方が関わるのがいい場合もあるしという選択肢は、つくっていきたいと思っております。私も特に長岡の小・中学校はそんなに何かを排除するようなものがなくて、非常に良い教育環境をつくっていているのではないかと、ある意味自信を持っていろいろな方に申し上げているのですが、ただ本当に多様性というか、どうなのですかね、孤立している市民の方がどうしてもいて、むしろ子どもというよりは親御さんの影響なのだと思いますけれど。そこはなかなか、学校に全て一元化して教育というものをこれからもずっとやっていけるかどうかというのは、決め付けないでやっていきたいと思っております。管理指導主事の方、何かありますか。この不登校とか教育の多様性みたいなことについて何かご意見あれば。

(佐々木学校教育課主幹兼管理指導主事) もとに戻ってしまいますが、私は学校が好きで教員になりました。私も小さい頃は学校で本当に悪いこともいっぱいして、喧嘩もいっぱいして、学校に行くのがすごく楽しかったという思いがあって、そこでの学びや体験が今に活かされているなというのがあって、それをもっと学校の教育活動として実現したいという思いがあります。ですので、学校の教育活動の中に、学校外で喧嘩をしたりして楽しんだ活動をもっともっと価値あるものとして子どもたちに提供してあげられると、子どもたちは学校に行きたくてしょうがなくなるのではないかと思います。ですから、そういう活動でも、先生方がよく考えて、子どもたちが学校に行きたくなるような教育活動で子どもたちを集めてほしいなど。そういった学校をつくりたいという思いがとてもあります。

(磯田市長) そういうものを一部の保護者の方がクレームをつけてやめろと言わないような状況も学校の管理上、教育委員会の一つの命題としてあるのかなと思っています。どうですか他にはありますか。

(本間学校教育課主幹兼管理指導主事) 長岡市内の学校を見ていると、各校いろいろな特色あることを実践しているというのは、私も担当校を見ながら感じるところが

あります。一方で、中学校になると、授業時数とか、制約もあつたりする中で、今文部科学省の方から授業時数を 1086 時間以内にするという指導が出ていますが、今までこんな地域と関わってきたいろいろな大切な行事があるが、これをやるには 1086 時間を超えてしまうとすごく悩んでいらっしゃる校長先生方もおりました。そういったものはぜひやってもらえたらいいなと思うところではあるのですが、立場上、時間を超えないようにという話をする自分が、非常につらいなと半分思いながら、でもいろいろな地域の話聞きながら、子どもたちのためにこんなことをしたいという思いを持っている先生方がたくさんいますので、そういった後押しが、教育委員会としてできたらいいなと考えおります。

(小嶋学校教育課主幹兼管理指導主事) やはり魅力ある学校づくりというのが大前提になっているかと思えます。ただ不登校の子どもたちの状況を考えると、様々な特性であつたり、複雑な家庭環境であつたり、私は子ども・青少年相談センターの所長もしておりますが非常に多様化した背景が感じられます。そういった中でご議論いただいている選択肢が様々あるということは子どもたちにとって自分の居場所を見つけられる、そういうことにも繋がっていくのではないかなということで、先ほどミライエ長岡のフルオープンですとか、そういった新たな居場所も期待できるところかなとお話をお聞かせいただきました。

(恩田委員) 今の先生方のお話を伺って、また保護者として感想がありました。佐々木管理指導主事からとてもワクワクするお話をいただいたと思えます。現場の先生のモチベーションが上がると、親もぜひ学校に預けたいという気持ちになると思えました。そのために、働き方改革の裏面で、労働基準法で言うところの残業に当たるものが制限されることで、先生方の活動に対する余白が削られてしまうことになると、そういう側面は出てくると思うので、その辺のバランスを何とか理解していかなければならないと思いました。今の小学校では、本当にたわいのないレクリエーションのような授業がとても子どもたちのモチベーションなり、またそれが地域の人たちと関わることになっており、ひいては郷土愛を育むということになっています。もちろん学力を高めることが大事ですが、余白の部分が削がれないように、保護者として、一市民としてもしっかりと理解しておきたいと思いました。

(廣川委員) 私、今日この会議に来るのに、雪の渋滞で遅れそうになってすごく慌てたんですね。会場に入るのもギリギリで東棟の4階にどうやって来たらいいのかわからなくて、すいません4階の行き方を教えてくださいと人事課に飛び込んで人事課の方が出てきてくださって、ここの自動ドアを出てそこからいくと行けますよと教えていただきました。そういったやりとり一つもこれからはA Iになるかもしれない。でも、人から教えてもらった方がわかりやすいこととか、人から言われた方が、理解しやすいことはこれからも人から教えてもらいたいと思います。子どもたちもこれからどんどん日常にA Iが入っていく中で、A Iの使い方を幼少期から知るのはすごく重要になっていく一方で、人との関わり合いの中でしか学べないこと、先ほど熊倉委員もおっしゃっていましたが、私達は社会的な動物なので群れの中でしか学べないことがあって、集団生活とか、同じ仲間と同じ体験をすることとか、そういった体験とA Iと両方あるのが、これからの子どもたちの環境だと思うので、どちらかに偏ることなく、そういったものがある環境をつくっていきたいと思います。

(磯田市長) A Iに関して感じているのは、A Iの進化というのはもう止めることができなくて、長岡市の職員もすべて自分のパソコンを開けるとすぐ使えるような状況で、それは別に職員に限らず、私もいろいろなことを自分の家で言うと、脇ですぐ家内が検索して、それはちょっと違うみたいだよとすぐ言うんですね。そういう意味では、しっかりそういうものも踏まえた意見なり、考え方をつくっていかないと、すぐ駄目出しをくらってしまうような、そういう社会になって、子どもたちはそういうのは自由自在に使うような時代、いわゆるフィジカルA Iというか、生産現場とか、会社の運営自体も、もうA Iを中心に決めていくという時代になって、いろいろな判断というか、認識というものも生成A Iの力を使っていく時代になってきて、そういう中で子どもたちが生きていくわけですね。ですから、確かに人間の群れの中で学ぶことももちろん大切で基本的だけれど、それだけでは駄目だということもまた事実で。ただ小学校、中学校あたりは、できるだけ人間の自然性というか、本来持つ身体性というかそういうものでしっかりと知能や知識というものを育てていく、その過程がやはり大事なのだろうなと思っています。そういう意味で自然の中とか友達の中でしっかり育っていくという、環境は守っていくべきだと思っています。ただ一方で、

社会に適応していくためには、こういうものにも慣れていかなければ駄目だなど、こういうものを自由自在に使えるようなスキルというものもやはり学んでほしいなどか、そういうことも両面でやっていきたいと思っております。長岡の小学校は、そこはもう大丈夫だと思っております。ここまで一人ひとりに先生が目をかけてその特性をちゃんと頭の中に入れて対応しているということは、本当に驚くべきことです。昔は確か小学校にクラス 50 何人いて、もう一人ひとり適当にやれという、そういう世界だったというふうに私は覚えているのですが、今は違いますよね。本当に一人ひとりの子どもたちに先生方が目をかけて、名前と呼んで、素晴らしいと思っております。これをしっかりと守りながら、新しい時代に必要なものは何かということは、まだ私もよくわからないのですが、ぜひまた皆さんからもご意見いただきながら、教育委員会ができなかったら、市長部局で、どういう学びの場をつくったらいいかということもぜひまたアドバイスいただければと思っております。今のところそういう何かありますか、こういう学びというか、こういうものを教えたらどうかということがあったら、最後にその話題をいただいて、今日の会議は閉じさせていただきたいと思っております。これからの新しい学びについて何かヒントがあれば、ぜひ。

(恩田委員) 先ほどからミライエ長岡の活用のことを市長はおっしゃっていました。ミライエ長岡の互尊文庫がとても素晴らしいと思ったのは、Wi-Fi を完備していますので、ICT を活用してその場で活動できる。上の階には、若い人たちが起業するためのスペースもあります。同時に、互尊文庫の本来のコンセプトとして社交の場があります。互尊文庫は、社交の場として人々が集まって話し合ったという史実があります。それが面白いことに、図書館なのに喋ることを推奨しているわけですね。だからその実態としての場を両立している。ICT と実体験の両立というものがどれほど実現できるかということは、まだわかりませんが、その趣旨自体がとても素晴らしいものだと見ておりましたので、引き続きどちらかに偏らない、長岡の教育の姿として役立てていただきたいと思いました。ただ社会性という意味では、ICT にしても、オンライン上での、結局は社会です。人とのコミュニケーションがあります。なので、いずれにせよ社会性を身につける教育が必要になってくる分野だと思っておりますので、もう何度もお話が出ていますが、両輪、両側面で行くべきだと思います。

(大久保委員) 特に幼少期は、遊びが学びなんじゃないかと思っていて、失敗をいっぱいしたり、思うようにいかないような経験をたくさんすることで学ぶことがたくさんあると思います。今、例えば学校から帰って公園で子どもたちが遊べるかという、冬は別として、ボールが蹴れない。ボール遊びは駄目だとかあれをしちゃ駄目、これをしちゃ駄目という公園が結構あって、実際公園に行っても体を使って友達と遊ぶことができないと、子どもってどこで遊ぶのか。そういう場所、子どもがのびのびと遊べる場所だとか機会とかをつくってあげることでも学びに繋がると思います。もちろんA Iとかタブレットを使っていくことは必須ですけど、小さい時から先にそっちに触れすぎてしまうと、脳への刺激がとても強いと思うので、面白いことが見つけにくくなってしまわないかなと思います。小さい子どもとか小学生、中学生が思い切って遊べる場所、機会をつくって、そこから学ぶのがいいのかなと思いました。

(廣川委員) 私も幼少期にいろいろな感情を味わってほしいと思います。悔しいとか、悲しいとかもそうですけれど、嬉しいことも楽しいこともいっぱい味わってほしいです。今、いろいろなことが先回りして、成功体験にショートカットで行ける方法とか、試行錯誤しなくてもたどり着けることがたくさんあふれていると思いますが、試行錯誤の中で学ぶこととか、そこで悔しさとかつらさとか、そういったいろいろな気持ちが動くような体験の仕掛けをつくっていききたいなと思います。

(磯田市長) 結局A Iというのは、A Iを使いこなす、A Iに対抗する人間の力になるでしょう。

(廣川委員) そうですね。こういう感情を味わうというのは、A Iでは予知できないと思うのです。

(熊倉委員) 多様な学びの場ということで、フィンランドのヘルシンキの市立図書館のことですが、図書館なのですが、ブースがあってそこにプロジェクターとかパソコンが置いてあったりして、若い人たちからお年寄りが集まって会議をしているのです。それから、別のところに3Dプリンターがあって自分で物づくりができたり、ミシンがあったりします。北欧はファブリックが有名なのですが、自分で縫物をしたり、物づくりができるという、そういう図書館なのですが、知恵を集めたり、物を実際につくったり、ディスカッションしたり、つくりたいものを形にするというのものがあって、

そういえば、ミライエ長岡はそうだよなと思って、規模はちょっと違うのですが、そういう知恵が集まる、そして形にできる、そういった場をもっともっと大きくする時に、市民も当然いいでしょうし、子どもたちも、学校はカリキュラムがありますから、それ以外のところで学べる場があるといいだろうなと思って考えておりました。

(磯田市長) まさにミライエ長岡はそういう考え方でやっています。学校の中にも、そういうふうな学校のミライエみたいな機能があってもいいのかなとか、例えば図書館をもっと充実させて、あるいはパソコンとかそういうものを充実させてそこで自由にゲームができ仲間と何か一緒にソフトをつくったり、そういうものもあってもいいのかなと思ったのです。教育長、いろいろなご意見が出た中で、教育長の考え方をここで最後をお願いします。

(金澤教育長) どのご意見も素敵だなと聞かせていただきましたし、自分もそう思うということがたくさんありました。その中で、あえてお話をさせてもらおうと、私はやはりあてがわれるものでなくて、自分でできる場があるといいな、要するに自由度もあって、そしてその子どもが何に興味があって何がやりたくて何が好きだとか、それを同じ興味を持った子どもたち同士で、どんどんできるとか、自分は一人でもいいけれど、これが大好きだからこれはとにかくやりたいと思うとそこにその専門の大人がいて、一緒になってやってくれるとか、そういったことが長岡の町中にあるとすごく素敵だなというのはずっと思っています。要するに、一人ひとりの可能性が伸びていくというか、これからそういう子どもの方が、可能性が十分あると思うのですね。一律に平均点がいいとかそういうことじゃなくて、そんな子どもたちが長岡から育つといいなと思います。

(磯田市長) いろいろご意見、ご提言をいただいた中で、ひとまず先ほど説明させていただいたこの実施計画については、終始しっかり図りながらご理解をいただきながら、学校の先生のゆとりというよりも本来業務、児童生徒に対する働きかけをより充実させるためには、こうした整理も必要だということで、保護者の皆さんをはじめ、市民の皆さんにしっかりと周知しながら、先生方がこれまで以上に、子どもたちと一緒に楽しく、そして充実した教育活動が行えるような方向をしっかりとつくっていきたいと考えております。市長としてはそういった教育委員会の動きをしっかりと支援し

ながら、ミライエ長岡の話も出ましたけれど、学校外の学びというものについても米百俵、将来の子どもたちの成長のために何が必要かということ形にしていきたいと考えております。

今日は多様なご意見、アドバイスをいただきまして本当にありがとうございました。ひとまずこれで私の役割は閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。(佐藤教育総務課長) 以上をもちまして、閉会させていただきます。貴重なお時間をいただき、たくさんご議論いただき、ありがとうございました。